

～もうすぐ1年生～



5歳児さくらさんはもうすぐ1年生。

年長さんとしては2人ですが、そらの部屋の3歳児さん4歳児さんたちと共に生活をし、小さい子たちから憧れられたり、自分の持っている力を貸してあげたり、時にはケンカしたりしながら育ち合ってきました。そして、友だちの気持ちを感じとり、仲直りする喜び、人として生きる土台を築いてきた子どもたちです。

これから先、いろいろなことがあって落ち込むこともあるかと思いますが大丈夫。2人は生活力や考える力、人と共に力を合わせてやっていく喜びを培ってきました。

Z君、H君、学校に行っても、友だちとたくさん遊び、ちょっぴり勉強し、命を大切に、そして、お家のお手伝いもやって、毎日元気にすごしてください。

卒園そして小学1年生、おめでとう！



### 「食べたものが、私になる」



先日、「いただきます ここは発酵の楽園」という映画を見て来ました。食と農をテーマにしたドキュメンタリー映画です。自然農の畑や田んぼで園児が自ら作物を収穫し、自分たちで作った味噌を使って味噌汁を作り、脱穀した米を炊き上げおにぎりをほおぼる子どもたち。子どもたちが米をとぎながら、「神様がいるよ」「そうだよ、この中に」「小さい神様がいるよ」「ちっちゃすぎるな」「あっ、神様こぼれちゃったよ」ととぎ汁を流している時に米粒が数粒流れてしまうと一生懸命拾い集めている場面がとても印象的でした。

この映画は、自分たちで食べる味噌を自分でつくる福岡市の保育園の様子を映した前作「いただきますーみそをつくる子どもたち」の続編です。

監督のオオタヴィンさんは、テーマは「命の循環」で、「生き物は、土から生まれる命を食べて生きている。元気になる。そしてやがて土になる。その仲立ちをするのが微生物、発酵菌と呼ばれる小さな命です。」「子どもたちは土と遊び、微生物いっぱい土から育った野菜を味わうことで、命の循環を五感で感じる。命をいただくことを知る」と語っています。

映画では他に、無農薬のリンゴ栽培をしている果樹農家、「微生物が土を生かし、その土がおいしい野菜を育て、人間の体を丈夫に元気にしてくれる」と循環型有機農業を実践している方、行政と一体となって小中学校の子どもたちにおいしいお米を提供したり、子どもたちと一緒に田植えや収穫まで行っている地元農家の人たちにもスポットが当てられていました。

「食べたものが、私になる」ということを伝えてくれる素敵な映画でした。

最後にオオタヴィンさん言葉の一部を紹介したいと思います。

「幼いころから土と遊び、稲を植えている子どもたちは、ちいさな、かしこいお百姓さんのようです。ピュアな感性の子どもたちはどうやら植物語や微生物語が話せるようです。人間も神羅万象の一象に過ぎません。植物や微生物がいなければ、一日も生きていけない存在です。

楽園を追い求めて科学文明を築いてきたはずですが、私たちはすでに、植物や微生物が作ってくれた楽園に住んでいたのです。いま、ここが“楽園”です。

そのことに 気づく言祝ぎ（ことほぎ）の言葉こそ『いただきます』ではないでしょうか。」